

押入れて花嫁

井上竜

Illustration  
葬蟻

「うるせえんだらうがあっ！」

ふいに床を突き抜けて聞こえてきた怒鳴り声は、  
語尾を擱つかんで振り回せそうなほどに野太くて硬いものだった。

どうやら、また下の住人が喚わめいているようだ。こんな朝っぱらから。きつとまた夫婦喧嘩ふうふげんかに違ちがいない。何を言ったのか知らないが、怒鳴られた奥さんを気の毒に思う。だがわたしには何の関係もない。

とは言え反射的に手を止めて聞き耳を立てる。  
静かになった。

今日は物の飛び交ののしう罵ののり合いにまでは、発展しなかったようだ。ほっとしつつもどことなく残念に思おもいながら、わたしは日課の掃除を再開することにした。回転式の粘着テープを転がして、畳たたみの上の埃ほこりや髪の毛を除去し始める。爽さわやかな夏の朝にふさわし

い、じゃるっ、じゃるっ、じゃるっ、というなんと小気味こきみのいい連続音が部屋中に響き渡る。二度目の怒鳴り声が聞こえてきたのは、その直後だった。

「うるせえって言ってるんだらうがあっ！」

手と一緒に、今度は心臓も止まった。

ひよっとしてわたしに言ってるのか？

いや、そんなはずはない。

たかがこれくらいの音が、下にまで聞こえることではないはずだ。フローリングならともかく、今現在わたしがテープを転がしているのは、畳たたみなのだ。むき出しの板と違い、イグサで織おられたこの国の伝統的な床材の畳は、クッションの役割を果たす。よつて下の一階にまで聞こえるなんて絶対に有りえない。そう自らに言い聞かせながら、わたしはあえて堂々と掃除を再開した、その瞬間。

「う・る・せ・え・っ・て・言・っ・て・ん・だ・よ・っ！」

と、今回は賑にぎやかなるバイブレーション付きの怒

鳴り声が、待つてでもいたかのようになたしても聞こえてきた。おそらくは襖の枠かどこかを蹴りつけたりらしい。部屋全体が余韻でみりみりと震えている。ついさつき朝食に食べた、テーブル上のカップ麺の汁が同心円の波紋を描く。リズムカルではあったものの、ラップとそれに合わせるステップの練習をしているわけではなさそうだった。わたしはあくまでも平静を装いながら、しかしそれまでの三倍速の素早さで掃除を再開した。予想通り、すぐにまた怒鳴り声が聞こえてきた。

「うるせえっつってんだろぅがござるあっ！」

間違いない。これは、わたしに対して言っている。なるほど。わたしはこれまでに下の住人が吐いたいくつかの名言ならぬ、迷言を思い出した。わたしが大学を長期間ずる休みしてオンラインゲームにはまっていたときに、つまりここ一カ月ほどの間に、**他にやることねえのかよ**、と、困り果てたかのようにつつたいつかのあの科白は、自分の奥さんにな

はなく、わたしに言っていたのだ。あと、**バイトくらいつてみたらどうよ**、というのもきつとそうなるほど。これで謎はすべて解けた。何もジツチャンの名にかけるまでもなく。

わたしは下の住人と同様、立ち上がって襖の枠に回し蹴りをくれてやる代わりに、とりあえず音を立てぬように注意しながら掃除を最後までやり終える、座椅子の上で団子虫のように丸くなって眠っている、ジャスコの頭をさわつとひとなでしてから一張羅の服を着て、最寄りのコンビニに行つて最安の菓子折りを買ったあとに、下の部屋のチャイムを押しした。

ドアに三種類もの防犯ステッカーを貼るだけでは飽き足らず、その隙間に鋼鉄製の防犯プレートまでも設置しているということは、どうやらなかなか用心深いお人のようだ。しかしこの築三十年にもなるろうかという純木造のアパートで、一体何をそれほ

どまでに警戒しているのだろうか。あるいは畳の下に万札でも敷き詰めているのかもしれない。ついでうかさつきから中にいる犬吠えすぎ。いるのわかってんだから出てよね早くまったくもう。わたしは、もう一度チャイムを押しした。

「あの、すみませくん、上の階の者ですけど……」

しかし、返事はなかった。もう一度チャイムを押ししてみても、犬が吠えまくるだけで反応がない。わたしがコンピニへ行っているわずかな隙に、どこかに出かけてしまったのだろうか。考えにくいことではあるが、その可能性がないわけではない。だが電氣メーターは足早に回り続けている。この速度から留守だとはとうてい考えることができない。やはり、男は中に存在するのだ。じっと息を潜めて、わたしが立ち去るのを待っているのだ。どうせまた何かの勧誘かセールスだろうと思っているに違いない。そこでそうではないということを証明しようと考えた

わたしは、犬の吠え声に調子を合わせ、続けてもう四度チャイムを押しした。念には念を入れて、合いの手で軽やかなノックを入れてみた。即興でそれらしき歌詞までも付けてみた。「ホカニヤルコト・ネエノカヨー。バイトクライ・シテミタラドウヨー」。するともくろんでいた通り、俄然いい感じになってきた。ビルボードチャート百位圏内は確定か、という感じになってきた。ここまでリズムカルかつファンキーな勧誘員、並びに販売員はそうはいないはずだ。わたしはいよいよ調子に乗って更にチャイムを鳴らし続け、ノックを続けた。もちろん歌詞を付けることも忘れない。

「○△■●▼□☆%6&~!」

と、早口すぎて今いちよく聞き取ることのできない、そんな意味不明の言葉と共にようやく男が姿を現したのは、わたしが我を忘れてしまう寸前だった。まるでわたしを狙ってでもいたかのように、突然乱暴にドアが開いたのだ。しかしわたしはそれを知っ

でもいたかのように、スウェーバックでさつと避けた。地面にかかとだけを残したままで、両足のつま先がふっと上がった。

「○△■◎▼□●★%6&~!」

と、やはり早口すぎて今いちよく聞き取ることのできない、しかしふてぶてしいことだけはいやが上にでもわかってしまう声で男が言った。なにげに初めて見るその顔は、愛読書はビー・バップ・ハイスクールです、とでも言いたげな顔をしていた。でもクローズも好きです。工業<sup>こうぎょう</sup>哀歌<sup>あいが</sup>バレボーイズは、もうっと好きです!

図らずもガン見してしまっているわたしに向かつて、

「○△■◎▼□●★%6&~?」

と、ふてぶてしいに変わりはないが、さつきよりもいくらか落ち着いた、何かを訊<sup>たず</sup>ねるかのようなの、しかしやはり早口すぎて今いちよく聞き取ることのできない声で男が続ける。わたしの外見を見て安心

したのかもしれない。喪<sup>もく</sup>服<sup>ふく</sup>に身を包んだ女ほど、この世でいたわられる存在はないからだ。男はよれたベージュ色の短パンに、それ以上によれている黒いタンクトップを身に着けていた。そしていまだに啼<sup>な</sup>き喚<sup>わ</sup>き続けている薄汚れた小型犬を肩に担<sup>かか</sup>ぐようにして抱えている。その出立<sup>いでた</sup>ちは、ぼくの本当の愛読書は実はデラべっぴんなんですよね、とでも言いたげなものだった。

本の趣味などというものは人それぞれだからどうでもいいが、不機嫌さを少しも隠そうとしない男の露骨な態度に、怒りを通り越して思わずどん引き。もしもわたしが宅配便の業者だったならば、この部屋に届いた荷物多分全部<sup>はいき</sup>廃棄。メール便だったら確実に廃棄。というか届けずにそのまま盗難。そういう可能性を、この男は考えたことがないのだろうか。IT全盛のこの時代、宅配便の業者ほど敵に回してはならぬ存在は、他にいはししないのだ。そしてその宅配便の業者は機械などではなく、血の通った人間

なのだ。だが残念ながら現在のわたしは人間ではあるものの、宅配便の業者ではない。そしてこれから先も、そうなることはまずないだろう。もし仮になつたとしても、届いた荷物を廃棄、あるいは盗難するのはやはり少々まずいかもしれない。ばれた時点で即刻会社を首になり、訴訟を起こされ、ありもしない多額の賠償金を請求されるかもわからない。ぼくの本当の愛読書は実はデラベつびんなんですよね、とでも言いたげな出立ちの、この男にだ。とすると、明日の朝新聞を一度だけ盗み、あとは毎日毎日一日前のものを入れ替える、というのはどうだろうか。

「あの、家、そんなにうるさかつたつすかね〜」

あえて下手に出ながらそうわたしが言うと、男はドアノブを握り締めたまま、こちらに対して信じられないくらいに美しい斜め右四十五度の角度を保ちながらわたしの目をじっと見つめつつ、

「○△▲■◎▼□●☆★%6&〜!」

と、やはり早口すぎて何を言っているのかが今いちよくわからない言葉を、やたらとまぶしそうな顔でまくし立てた。たまらずに視線を逸らすと、廊下の奥に広がっている、ブラックホールよりも暗いと思われる暗黒が男の肩越しに確認できた。わたしは何もかもを忘れ、その暗黒の中へと身を投げ出してしまいたい衝動をぐっと堪えた。

「○△▲■◎▼□●☆★%6&〜!」

と、間髪入れずに、男は続けてまくし立てたものの、やはり早口すぎて何を言っているのかが今いちよくわからなかつたので、とりあえずにこにこしながら聞いておいた。新聞を取っていればいいのだが、と心から思いながら。わたしは男にしゃべるだけしゃべらせたあとで、で、あの、これ、つまらないのですが、と言って菓子折りを渡した。あくまでもにこにこ顔を続けたままで。

「じゃあ、これで失礼します。これも何かの縁ですから、まあ仲良くやりましょうよ!」

「○△■●◎▼□☆★%&ゝ!」

ドアを閉め際に男がまた何か言ったが、やはり早口すぎて何を言っているのかが、今いちよくわからなかった。ただそれが友好的な言葉でないことだけは、その表情と口調から理解できた。こっちは下手に出て、菓子折りまで渡したというのに。だがわたしはにこにこ顔をやめない。男は自らの身体を溶け込ませるようにして、犬と共に奥の暗黒の中に消えていった。「○△■●◎▼□☆★%&ゝ……」というけだるく退廃的な、しかし早口すぎて何を言っているのかが今いちよくわからない言葉と共に……。と、そこで、思わぬ事件が起きた。ドアが閉まる寸前に、男の唾が一滴、わたしの靴に飛んだのだ。埃程度の大きさではあったが、一滴は一滴だった。そして唾は唾だ。わたしはドアが閉まったあともしばらくの間、にこにこ顔のままその場に佇んでいた。そして一分近くがすぎ去ったそのあとに、静かに一歩分横にずれたあとで、やはりあくまでもにこにこ

顔のまま渾身の力を込めて、ドアに向けて思い切り回し蹴りを放った。

「無い乳は振れぬわっ!」

アデイダスの小汚いサンダルを履いた男が鬼の形相で部屋から飛び出してきて、二階へと続く階段を駆け上がった。廊下を踏み鳴らしながら歩き、一番奥にあるわたしの部屋のチャイムを狂ったように鳴らしまくっている。愚か者めが! プロパンガスのボンベの陰にしゃがんで隠れていたわたしは立ち上がり、男の部屋へと靴のまま余裕で侵入。部屋はカーテンが締め切られていて薄暗く、ほとんど視界が利かなかったが、自分の部屋とまったく同じ間取りだからそれほど問題はない。犬が啼き喚かぬように台所に置いてあった安いドライフードではなくて、値段の張るペディグリーチャムの缶詰の方を勝手に半分やってから、残りの半分の入っている缶をポケットに入れて、万が一戦闘になった

ときのことを考えて、一度玄関へ行つてブレーカーを落としてからまた部屋に戻る。その際に、男がわたしの部屋のドアをグーで叩きまくっているあたかも神々の怒りのような音が上方から聞こえてきたが、今のわたしには何ら関係がないので一人にんまりとほくそ笑んだ。

「あ、どうも初めまして、上の階の黒宗我部愛子です」

押入れのある部屋に入った瞬間に、敷かれています布団の上に全裸の女性が横たわっているのが見えたので、奥さんだと思つてとっさにそう挨拶してみたが、何の反応も無い。ひよつとしたら奥さんではないのでむくれているのだろうか。いや奥さんは奥さんに間違いはなかったが、どうやらダッチ・ワイフのようだった。空気を入れる安物の方ではなく、全身がシリコン製で髪の毛百パーセントの、超の付く高級品の方だ。一度ネットであつかりと見てしまったことがあるので、否応なくそれがわかつて

しまう。価格は確か、税込みで九十四万五千円だったろうか。送料は別。代金引換限定。傍からはアンティーク家具に見えるよう梱包しています。なるほど、一見過剰とも思えた表の防犯対策の意味がわかったような気がした。わたしはその奥さんの首と腰と膝に力を込めて四つに折り曲げてから押入れに押し込むと、すぐさま全裸になり、しかしいくら急いでいるとは言つても大切な一張羅ということもあつて、脱ぎ捨てた衣服を可能な限りしごく丁寧に畳んだあとにそれも一緒に押入れの中に入れて、身に着けているものは真珠のネックレスのみという格好になったのちに、ここまでくればおそらくはもう大丈夫だろうと、寄せて上げさえすればゆうにFカップは超える胸をほつとなでおろしながら、ゆつくりと布団の上に横たわった。エアコンで冷えぬように、足元で丸まっていた夏掛けをしっかりと腹にかける。やはり全裸に勝る衣服はこの世にはないと思ひながら。しかしそれは危険が大きすぎるからやめること

にして急いで服を着ると、奥さんを元の場所へと寸分の狂いもなく正確に戻したあとで、今度はわたしが四つに折り曲がって押入れに入る。その頃には男が部屋に戻ってきて、「○△■◎▼□●☆★%&」と、「!」と、たった今戦場から舞い戻ってでもきたかのように荒々しく勇ましい、しかし早口すぎるために何を言っているのかが今いちよくわからない言葉を使いながら当然かのごとく全裸になり、布団の上に横たわった。やはり冷えないようにするためか、夏掛けをしつかりと腹にかけた。自分だけでなく奥さんにもちゃんとかけてあげたところを見ると、たとえぼくの本当の愛読書は実はデラべっぴんなんですよね、とでも言いたげな出立ちの男とは言え、最低限の女の扱いだけは心得ているようだ。そしてそのあと男は、「○△■◎▼□●☆★%&」と、いくらか落ち着いてはきたものの、やっぱりどこまでいっても早口すぎるために何を言っているのかが今いちよくわからない言葉をしばらくの間、繰

り返ししゃべり続けていた。どうやら奥さんと何ごとかを話しているようだった。わたしは暗闇の中で残りのペディグリーチャムをむちむちと頬張りながら、男の話に耳を澄ませた。途中から口調がゆっくりになり、ようやく内容を理解することができ始めた。

「だからね、いいかい？ アギレラ。よく先生やお母さんが子供に、世の中には食べたくても食べられない人間がたくさんいるんですよ、だから好き嫌いなんかしなくて、出されたものは最後まできちんと食べなければいけませんよ、って言うだろ？ あれはね、一見筋が通つるように思えるお説教なんだけど、実は違うんだよ。確かに、この世界には食べたくても食べることでできない人間がいる、それは本当だよ？ 悲しいことに、それは真実だ。でもだからと言って、それが好き嫌いをせずに、出されたものは最後まできちんと食べなければいけない、という理由には、ならないんだ。いくら食べ物でつな

がつているとは言え、それとこれとは、また別の次元の問題なんだよ。何よりそんなお説教をされて、子供たちが誰一人納得できないのが、その完全なる証拠さ。にもかかわらず、大人たちははしたり顔でそのお説教を繰り返す。かつては、自分たちだってそのお説教に納得がいかかったはずなのだ。でも、子供たちは誰一人納得がいかない。いかないままに、鼻をつまんでニンジンやピーマンをえいっと食べる。ほうれん草やセロリをやあつと食べる。ときには、水や牛乳と一緒に飲み込んだりもしてみる。そしてそれすらもできないときは、にこにこ美味しそうに食べているふりをして、こっそりと机の中に隠してみたりもする。でもそのままうっかりと忘れてしまつて、掃除の時間に隠したそれが転がり落ちてきたりもする。そうするともう、その子のあだ名は決まつたようなものだ。そうなるのがたまらなく嫌だから、卑怯<sup>ひきょう</sup>なのを承知<sup>しょうち</sup>の上で、もう隣の友だちの食器に、隙を見て放り込んでしまふしかない。でも

その子が嫌いなものはたいてい友だちも嫌いだから、その友だちも隣の友だち、つまりは自分の食器に隙を見て放り込み、結局は倍の量のそれが、知らないうちに戻ってくることになる。そして何も気が付かないままにすつかりと食べてしまうのだけど、でもそれはその子がたまたまアホな子だっただけで、好き嫌いの問題を真に克服<sup>くつぷく</sup>したとは言えないはずだ。だからそんなお説教には、ほとんどと言つてもいいくらいに意味がない。ただ、一つだけここで注意しておきたいのは、だからと言つて、食べたなくても食べられない人間のことを、忘れてはいけないってことだ。うん、それはいくらなんでも自惚<sup>うぬぼ</sup>れがすぎるだろう。だからそこは、先生やお母さんの意見に一票を投じることしようか。でもね、繰り返すけど、それが好き嫌いをせずに、出されたものは最後まできちんと食べなければならぬ、という理由には、決してなりはしないんだ。だって考えてもみてもらふよアギレラ。食べたなくても食べられない人間が、

好きなだけ食べられるようになったとき、一体どうなる？ そのとき、結局は好き嫌いの問題に突き当たってしまうじゃないか」男はそこで一度言葉を区切ったかと思うと、途端に早口になり、○△■◎▼  
 □●☆★%6&と、ひどく自虐的に、しかしやはり早口すぎて今いち何を言っているのかがよくわからない言葉を言いながら、軽く笑った。「つまりねアギレラ、ぼくが何を言いたいかって言うとな、目の前に何か問題が立ちはだかったとき、他の誰かや何かと比べて行動をしては、いけないってことさ。見かけに惑わされて、いかにもそれらしい答えで満足してはいけないってことさ。だって全ての間違いは、そこから始まってゆくんだからね。だからそう、そうならないためにもぼくたちは、ただ解決を目指すんだ。子供たちを含めた誰もが納得することのできる解決を、しっかりと考えて。それはきつと、どこかにあるはずだから……なあアギレラ、そうは思わないかい？ アギレラ？」

しかし、奥さんことアギレラは何も答えなかった。当たり前だ。しかし男の言葉に応えたいと思うわたしがいることもまた当たり前だった。そこで、

「Yeah」

と、アギレラつぼくわたしは答えてみた。

すぐに言わなければよかったと後悔したが、なんと驚いたことに、男はわたしの声をアギレラのものとして信じてくれたようだ。襦を少しだけ開けて覗いてみると、男は嗚咽を漏らしながら何度もアギレラの名前を呼び、アギレラの上に覆いかぶさって腰を動かしていた。これは千載一遇の大チャンスだと思っただわたしはそこですかさず、

「汝の隣人を愛せよ」

と、英語ではどう言うのかわからなかったのですが、日本語で付け加えた。思いの外舞い上がってしまったためにアギレラつぼく言うことをついうっかりと忘れてしまったが、しかし男は何の疑問も抱かずにうんうんと頷きながら、そうだね、わかったよ、

わかったよアギレラ、Yeahと繰り返しながら、更に素早く腰を振り動かし始めた。かと思うとその二秒ほどあとに、突然痺れたかのようにして動かなくなり、ぐったりと全身の力を抜くと、アギレラの上へと覆いかぶさったままで、眠りに落ちてしまったようだった。わたしは音を立てぬように細心の注意を払いながら押入れから出ると、啼き喚かぬよう新たなペディグリーチャムの半分をまた犬に与え、残りの半分の入っている缶をポケットに入れたあとで、菓子折りを持って外に出た。それからゆらりとドアの斜め前に立ち、こおくと限界まで息を吸い込んだあとで、渾身の力を込めてドアに向けて回し蹴りを放った。

**「出る杭は打たれるかもしれないが抜かれるよりはマシっ！」**

わたしはまたプロパンガスのボンベの陰に隠れて待つてみたが、今回は男は飛び出して来なかった。

犬も啼かない。どうやら男は熟睡し、犬の方もペディグリーチャムに夢中のようなのだ。それをいいことに、よしておけばいいものを、根っからの勝負師気質なわたしは、再びゆらりとドアの斜め前に立ち、これまで以上にこおくと限界まで息を吸い込んだあとで、全身全霊の力を込めて、ドアに向けて回し蹴りを放った。

**「即ち出ぬ乳は揉まれぬかもしれないが垂れるよりはマシっ！」**

わたしはまたガスボンベの陰に隠れて待つてみたが、今回も男は飛び出して来なかった。犬も啼かない。どうやら男は予想以上に熟睡し、犬の方も予想以上にペディグリーチャムに夢中のようなのだ。それでわたしは安心してそのままコンビニへと行ってレシートを提出し、菓子折りを返品してから自分の部屋に戻り、何はともあれまずは全ての衣服をすりと脱ぎ捨てると、ハンガーにかけてからタンスにしま

い、身に着けているものは真珠のネックレスのみという格好でペディグリーチャムをジャスコにやってみたもののまったく手をつけようとしなかったので、仕方なくいつものねこ元気を与え、そのあとで押入れの奥の奥から引つ張り出したデラベっぴんを座椅子に座って久しぶりに読みながら、むちむちと自分で食べた。それからいつものように夜になって電話をかけてきた田舎いなかの母親と、少しだけ話をしてから眠った。

「あ、母さん？ ごめんね、いつも仕送りばしてもらって。お金の方大丈夫け？ わたし、ちよっと働こか？ え？ そうじゃねえ、宅配屋とかどげんじやろうかねえ。今の時代ほら、ネットやなんやかやで、通販がかなり勢いあるで、宅配屋なら景気ええんじやなかるうか。え？ はは、まあ、それはそうじゃが。きつとわたしじゃ続かんじゃが。うん、うん、わかった。うん、うん、お金の心配なんかせ

んと、とにかく今はちゃんと勉強するで。はい、はい、じゃあね、おやすみ」

マッドパーティーがごとき激戦の

火蓋は切って落とされた！

続きは『Powers Selection - 新走 - 』で！！